

2018 年 1 月 21 日（日）「波の上を歩くイエスの権威」

マタイ 14:22-36

22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。23 群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。

24 しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。25 すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。26 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。27 しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

28 すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」29 イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。30 ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください」と言った。31 そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」32 そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。33 そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です」と言った。

34 彼らは湖を渡ってゲネサレの地に着いた。35 すると、その地の人々は、イエスと気がついて、付近の地域にくまなく知らせ、病人という病人をみな、みもとに連れて来た。36 そして、せめて彼らに、着物のふさにでもさわらせてやってくださいと、イエスにお願いした。そして、さわった人々はみな、いやされた。

【序論】

19 世紀の音楽史に君臨したフランツ・リストという作曲家／ピアニストがいます。彼が遺したピアノ曲に「二つの伝説」という宗教的な作品があるのをご存知の方もいらっしゃるでしょう。リストは一時期、修道士になったこともあり、多くの宗教的作品を残しています。「二つの伝説」は、二人の聖人にまつわる伝説を音楽にされていて、第一曲には「小鳥に説教をするアッシジの聖フランチェスコ」、第二曲には「波の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」というタイトルが付けられています。フランシスコ修道会の創設者、中世最大の聖人と言われるアッシジのフランチェスコ（1182～1226 年）のことは多くの方がご存知でしょう。一方、パオラの聖フランチェスコ（1416～1507 年）

は別人で、時代的にも2世紀ほど後に生きた人物です。彼は若い頃、短い期間「フランシスコ修道会」に入っていましたが、イタリアのパオラ付近の海辺の洞窟で隠世修道士としての生活をするようになり、それを「ミニム会」と呼ばれる托鉢修道会へと発展させました。彼は「心を読み取る」霊的な力を持っていたと言われます。「波の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」という作品は、メッシーナ海峡に舟を出すことを拒否されたフランチェスコが、マントを海に広げてその上を渡ったという伝説を基に作られました。左手のトレモロやスケールで様々な波の音形が作られており、荒れ狂う海が描写されています。

この第二曲は、今日の聖書箇所、主イエスが波の上を歩いておられる姿を彷彿させます。暗い湖の上を歩く主の姿を想像しつつ、御言葉に聞いていきたいと思います。

【本論】

今日の箇所全体を貫いているのは、「イエスとは何者であるか」「イエスの使命とは何か」という二つのテーマです。群衆、弟子、ゲネサレの村人という三種類の人々が登場しますが、彼らがナザレのイエスをどう見ていたか、何を求めていたかが解釈のポイントになります。

本論 1. 群衆の無理解

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。(14:22)

まず、ここに登場する群衆とは、前回「パンの奇跡」にあずかった男性だけで五千人の人々のことです。女性や子どもを含めれば一万人を超えたかも知れません。彼らは「寂しい所」(14:13)まで主イエスに付いて行き、夕方になってひもじくなった時に、尽きぬパンと魚によって養われた人々であります。この奇跡を通して、主ご自身が彼らに悟らせたかったことは、主イエスこそがイスラエルを真に養うことのできる方であり、その食卓が「天国の饗宴」を象徴する意味を持っていたということです。もちろん、主はそのようなことを明確に語られた訳ではありません。しかし、それまでに語ってこられたメッセージの内容から、人々は悟るべきだったのです。ところが、人々は全然違った方向へと進んで行ってしまふ。主イエスを政治的リーダーに立て、ローマ帝国の支配から解放するメシヤとして祭り上げようとしたのです。彼らは熱狂しました。ヨハネ福音書には、この時のことが別の視点で描かれており、群衆が何を意図していたかが記され

ています。

人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行くこうしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。(ヨハネ6:14-15)

一万人もの人々が集まれば、そこには運動が起きるかも知れません。ともすれば、暴徒となって、ヘロデの宮殿に押し入り、更にローマ皇帝への反逆を始めていく可能性もある。過去にはそのような出来事が度々起きていました。主はそういうメシヤとして来られたのではなかった。パンの奇跡に暗示されるように、ご自分のいのちを与えるメシヤとして来られたのです。

ですから、主は何としてもこの勢いづいた群衆を解散させなくてはなりません。彼らの思惑通りに事が進んでいけば、それは悪魔の道を進むことになるからです。弟子たちまでもが群衆の勢いに乗ずる危険性もありました。だから、主は「強いて」弟子たちを舟に乗せてしまわれたのです。

群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。(14:23)

主は一人になって祈る必要がありました。それは、主ご自身も誘惑に晒されていたからです。十字架の苦しみによらず、人々の願いに応えれば、事はスムーズに運んでいく。悪魔は常に楽な道を提供し、神の贖いのご計画を歪めようとします。

本論 2. 弟子の無理解

しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。(14:24)

強いて舟に乗り込まされた弟子たちでしたが、雨季特有の突風に見舞われたのでしょう。彼らはにっちもさっちもいなくなり、何時間も舟を漕ぎあぐねていました。

すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。(14:25) 大波の上を歩かれる主イエス。自然界を支配する堂々たる神の子の姿がそこにはありません。「夜中の三時」とは、直訳すると「第四の時」で、ローマの時間の数え方が反映されています。ローマでは夜を四つの時間に区切って考えていました。「第四の時」とは、午前3～6時を指します。かれこれ10時間ほど湖の上を彷徨っていたということになりますか。群衆に押し迫られて疲弊していた弟子たちは、更なる困難に見舞われ、もはや限界だったことでしょう。その時、彼らは遠くから何者かが近づいてくるのを見ました。

弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。(14:26)

確かに、深夜の荒れ狂う湖の向こうから人影が近づいてきたら、恐ろしいものがあります。彼らを笑うことはできないのですが、マルコ福音書には、彼らが主イエスを見分けられなかった理由として、彼らの信仰の問題があったと書かれています。

というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。(マルコ 6:52)

彼らが悟らなくてはならなかったこととは何でしょうか。それは、イエスは神の子であるということ。イエスの権威です。荒れ狂う波をも鎮めることのできるお方が共におられるということを、彼らは忘れてはいけなかった(主は既に8章でも風と波を鎮めておられます)。

しかし皆様、私自身は彼らの不信仰な姿を見て、^{ひとごと}他人事とは思えない何かを感じるのです。確かに自分にもそういう臆病な面がある。一種の PTSD なのかも知れませんが、暗闇の中で、過去に経験した怖い記憶がよみがえってくることがあるのです。そのような時、私は懸命に主イエスと呼び求め、守ってくださいと心で叫びます。

しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。(14:27)

「わたしだ」という言葉は、原文では「ἐγώ εἰμι」(エゴー・エイミ)。神がご自身を啓示する時に使う表現で、出エジプト 3:14 の「わたしはある」という言葉とイコールです。主イエスは様々な場面でこの表現を使っておられる(マルコ 14:62、ルカ 24:39、ヨハネ 8:58、18:5-6)。「私こそ全能の神。あなたがたを守る神。共にいる神である」という力強い宣言です。

本論 3. 理解へと導かれた弟子たち

すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」(14:28)

ペテロの衝動的な性格と言いますか、一番弟子という自負ゆえでしょうか、他の人たちが思いつかない申し出をします。波の上を歩いてみたいと。彼の行動については賛否ありますが、私はここに彼の信仰があると見ています。

波を「この世の困難」に譬えるならば、主イエスの力によってその「波」の上を歩くことができる。それを乗り越えることができる。そう解釈して差し支えないでしょう。一人一人の現実に照らして、その情景を思い浮かべていただきたいのです。

イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。

(14:29-32)

主イエスがお命じになる。すると、ペテロは力を受ける。波の上を歩き出す。信じがたいことを一人の弟子が経験したということが、福音書にしかと記録されたのです。しかし、ペテロは波を見て怖くなりました。主イエスが一瞬見えなくなった。すると、途端に波に吞まれてしまいました。よく、運転をする時には目の前ばかり見ないで、先の方を見るようにしなさいと言われます。高速道路で目の前ばかり見ていると、ジグザグ運転になって危険です。先の方を見ることで、行くべき方向をしっかりと定められるのです。主イエスから目を離さないでいること、これが困難を乗り越えていく秘訣です。信仰があっても、目の前に立ちはだかる諸問題ばかりに目を向けてしまうと、私たちはパニックに陥ることがある。その時こそ祈るべきなのです。

ペテロは溺れかけましたが、主に呼ばわれました。ここにも彼の信仰があります。私たちが学ぶべき姿勢があります。失敗はしてもよい。しかし、その度に主に依り頼むのです。主はその人の腕を掴み、引き揚げて下さるでしょう。「信仰の薄い」という言葉にも、主の思いやりがあります。「信仰がない」とは言われていない。信仰は小さくとも、すぐにグラついたとしても、尚も主に依り頼むこと、それが信仰の本質です。

そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です」と言った。

(14:33)

ここには、弟子たちによる主イエスへの最初の礼拝があります。信仰告白のクライマックスとなるのは、16章のペテロの言葉ですが、ここでは「イエスとは何者であるか」という問題に、一つの答えが与えられている。イエスとは神の子であると。

本論 4. ゲネサレの人々

さて、いよいよ 14 章を終えようとしています。34～36 節に上陸後の出来事が短く載せられていますので、見ておきましょう。

彼らは湖を渡ってゲネサレの地に着いた。すると、その地の人々は、イエスと気がついて、付近の地域にくまなく知らせ、病人という病人をみな、みもとに連れて来た。そして、せめて彼らに、着物のふさにでもさわらせてやってくださいと、イエスにお願いした。そして、さわった人々はみな、いやされた。

ゲネサレとは、ガリラヤ湖北西岸の平地で、パレスチナで最も肥沃な地の一つだそうです。ここはヘロデ・アンティパスの領土内であり、主イエスの噂はとうに広まっていた。この地の人々は、イエスが来たことを耳にすると、どっと押し寄せ、病人を連れて来ました。そして、「着物のふさにでも」触ることで、病の癒しを得ようとしたのです。病人は健常者に穢れを移してはいけないという当時の考え方がありましたから、直接触れることは憚られたのでしょう。それでも、触れた人々は皆癒されたようであります。ここでは、長血の女の癒しの時のような具体的な描写はありません。主イエスがみくちやにされるように、人々に力を吸い取られていくような様子が描かれているだけです。マタイは、彼らに信仰があったかどうかということについては何もふれていない。ただ、一つ言えることは、彼らはイエスが癒し主であることを知っていたということ。そのところに、「癒される信仰」はあったということになります。しかし、もし彼らの求めていたものが「癒し」だけであったとしたら、やはり主イエスの真の使命を理解していないことになるでしょう。

現代でも、キリスト教信仰に入る人は何を求めているのでしょうか。この世での繁栄のため、ご利益のため……そういうことばかりを目的としたならば、必ずどこかで挫折します。イエスを神の子と認め、この方の究極的な使命とは「罪と死からの解放」であるということを知らなくてはならないのです。

【結論】

私たちの霊の目は開かれているのでしょうか。神の子イエスを知っているか。この方の使命を理解しているか。この方にあって、罪と死の問題を解決していただいたか。もし、このことがまだ不明瞭であるならば、キリストの御名を呼ぶところから始めていただきたいのです。その時、私たちの人生のすべての困難は、この方と共に乗り越えていくことができるでしょう。波の上を歩くイエスの権威を知る。すべてのものの支配者を、この人生の主として歩み出したいと思います。

【祈り】

からし種ほどの信仰をも見過ごすことのないイエス様。私たちの信仰とは、自分の確信に起因するものではありません。ただただ、あなたの恵みの大きさを信じているに過ぎないものです。それでも主はよしとしてくださるところに、私たちの平安があります。どうか、依り頼む私たちに恵みをもたらしてください。救いの道を最後まで歩み抜かせ、この世の様々な試練を共に乗り越えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人生の荒波に翻弄する者に、「わたしはある」と宣言し給う、父なる神の愛。
溺れる者に手を差し伸べ、試練を共に乗り越え給いし、主イエス・キリストの恵み。
罪と死からの解放と共に、あらゆる必要を満たし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。